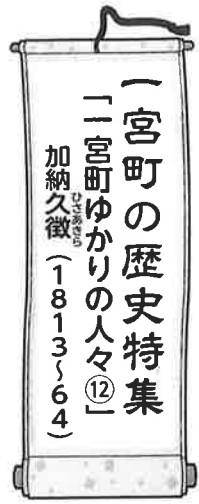


# 【広報文化財コラム】「一宮の歴史特集」⑫

平成30年2月号



加納久成は上総一宮藩の2代目の藩主です。一宮に陣屋を移し立藩した久成(1797~1847)の長男として文化10年(1813)に誕生しました。天保13年(1842)に父の隠居に伴い家督を相続、その後大番頭や講武所(幕府の設置した武芸の訓練所)総裁、奉者番(江戸城中での武家の礼式を管理指導する役職)、若年寄など幕末期の幕府の要職をつとめます。文久元年(1861)には孝明天皇の異母妹・和宮が14代将軍徳川家茂に降嫁した際には京から江戸までの道中の警護役をつとめました。また、文久3年(1863)に九十九里沿岸で蜂起した真忠組の討伐では他藩と協力



▲「拜領押絵 鷹」(町教育委員会所蔵) 画賛によれば文久3年(1863)の作か。画は加納久成(1838~63、久成の養子)、譲が久成によるものである。

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

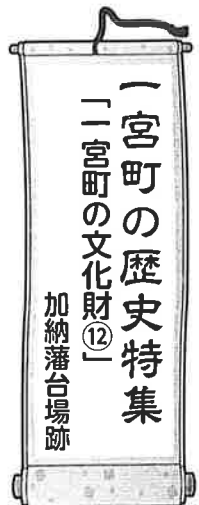
して藩兵を動員して、翌年の1月には鎮圧するなどの功績を挙げました(真忠組の乱)。

一宮藩政においては、天保15年(1844)に灌漑貯水池を拡張し、洞庭湖と名づけたほか、家臣の岩堀市兵衛に命じて市街地へ水路を建設しました。この水路は「市兵衛堀」と呼ばれています。

また、歴史・文化への関心も高かったようで、上総廣常の故事にならい、玉前神社に鎧(萌黄緘胴丸・町指定有形文化財)を奉納したり、廣常の居館跡といわれる高藤山城址に顕彰碑を建設したりしています。

真忠組討伐の2カ月後の元治元年(1864)3月に死去しました。のちに同じ読み「久朗」がいることから、久成を「きゆうちよう」、久朗を「きゆうろう」と区別して読むこともありま。

平成30年3月号



江戸時代末期、通称「鎖国」体制下の日本の沿岸部には外国船が頻繁に来航しており、房総半島沖も例外ではありませんでした。

幕府内部でも要職をつとめていた時の上総一宮藩主・加納久成(詳細は前号文化財コラム)は海防のため、一宮海岸に砲台を建設しました。

砲台は5ヶ所、天保15年(1844)に完成し、それぞれ1門ずつ口径6.5センチ、砲身154センチの火縄式



▲現在の台場付近

の大砲が据えられたといいますが(据えられた大砲は七門との伝承もある)。このうち二門は茂原市立美術館・郷土資料館が所蔵しており、千葉県指定有形文化財となっています。

古文書によれば砲台はそれぞれ「鱗芝口」「蓮谷口」「新道口」「古道口」「神道口」と呼ばれていたようです。なお、この台場跡は町の指定史跡となっています。

現在跡地には小高い丘に昭和44年(1969)に建立された石碑が建つのみで、当時の面影はありません。唯一、小字に「台場」「南陣所」などが残るのみです。



▲加納藩台場跡石碑(昭和44年建立)